（様式）

令和３年度　総合的な探究の時間推進事業　報告書

学番	74	学校名	新井　　高等学校

１　研究テーマ等

⑴ 研究テーマ

生徒の学びのテーマ【地域を知り、社会とつながる生き方を考える】

教師の学びのテーマ【誰でもできる、続けてできる探究学習】

⑵ 研究テーマ設定の理由

生徒の学びのテーマ：【地域を知り、社会とつながる生き方を考える】

本校では進学等で地元を離れる生徒が多い。しかし生まれ育った地域についてよく知らないうちに離れる生徒が大半である。社会で起こっている問題は、地域でも課題となっていることが多い。地元を離れる前に住んでいる地域の抱える課題を知り理解を深めることが、卒業後も社会への問題意識を持ち続けることにつながる。各自の進路先で社会の一員として自分には何ができるかを探り、どう生きるのかを問い続けてほしいと考え設定した。

教師の学びのテーマ：【誰でもできる、続けてできる探究学習】

今年度は、本校が探究学習推進事業の研究実施校の指定を受け、取組を始めて３年目となる。各校が関係機関との連携や、内部の組織づくりの充実を進める中、新井高校では持続可能な質量や難易度で指導ができる内容の追究が「総合的な探究の時間」の普及につながると考え、本テーマを設定した。

⑶ 実施体制

①「総合的な探究学習推進委員会」（校長、教頭、各学年主任、教務、進路各１名）を編成（Ｒ１、Ｒ２）

→【「総合的な探究の時間」推進委員会】（校長、教頭、各学年主任、学年より各２名）を編成。（Ｒ３）

②推進委員会の原案をもとに、具体的な計画を１学年団で練り実施する。（Ｒ１、Ｒ２）

→ 委員会を実施報告の場として、各学年の進捗状況を確認・共有する（Ｒ３）

③「産業社会と人間」と連携して実施する（Ｒ１、Ｒ２、Ｒ３）

２　今年度の取組について

⑴ １学年

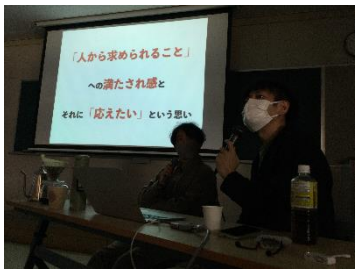
【身近なモノゴトから課題を探り、新聞記事にしてまとめる】をテーマとして取り組んだ。活動の前提として、全校で新聞記事を切り取りリレー方式でまとめる活動を行っている。記事から、課題や問題を探り研究テーマとして発表した。

＜主な活動内容と時数（抜粋）＞

実施日	活動内容	時数
9 月 16 日	ガイダンス・新聞記事からの課題発見	2
12 月 9 日 10 日	探究校内研修 （講演会・インタビュー・ポスター制作）	12
1 月 27 日	学年発表会	2

以上の活動以外に、インタビュー準備・各種講演会・国際理解講座等の活動を含め、計『総合的な探究の時間』は計３５時間とした。

ZOOM によるインタビュー



地元の若手企業家との探究研修会

(2) ２学年

【修学旅行を通じて、地元と他地区を比較しまとめる】をテーマとして、取り組んだ。インターネットや書籍から情報を収集した。新潟市と上越市と比較する事前レポートと事後レポートを作成した。作成したレポートは品評会形式で、学年全体がレポートを共有した。

＜主な活動内容と時数（抜粋）＞

実施日	活動内容	時数
11 月 2 日	事前学習（班別の調査活動）	1
12 月 14 日	事後学習①（比較レポート作成）	1
1 月 18 日	事後学習②（事前事後レポート品評会）	1

以上の活動以外に、各種講演会・分野別進路説明会・選択科目説明会等の活動を含め、『総合的な探究の時間』は計３５時間とした。

事前研修（調査活動）

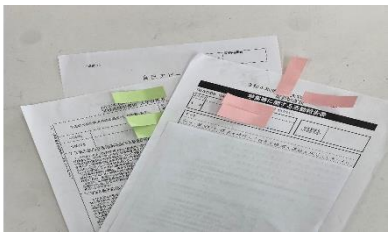
⑶ ３学年

【１，２年での探究活動を個別の進路実現に活かす】をテーマとして、取り組んだ。１年次、２年次の探究学習の成果（１年：新聞を読む、インタビュー、新聞製作、成果発表会等　２年：書籍調査、インタビュー、ポスター―セッション、成果発表会等）を基にベネッセコーポレーションの論理言語力検定（リテラス）を活用しながら思考力や表現力を高め、個々の進路実現に向けて、志望理由書の作成や、面接試験・プレゼンテーションの練習に取り組んだ。

＜主な活動内容と時数（抜粋）＞

実施日	活動内容	時数
４月 23 日	リテラス演習(情報理解力：聴解)	1
７月～12 月	面接練習・プレゼンテーション練習	個別
11 月５日	リテラス検定(２級・３級)	1

以上の活動以外に、各種講演会・分野別進路説明会・進路ガイダンス等の活動を含め、『総合的な探究の時間』は計３３時間とした。



探究活動の成果を自己ＰＲシートに反映

⑷ 今年度の取組のまとめ

各学年とも、前年度の内容をおおむね踏襲した形で展開した。３年間で確立した【調査活動、インタビュー、発表、ルーブリック】といったキーワードを意識しながら実施した。１学年については、校外研修の代替措置として校内探究研修を実施した。コロナ禍で現地研修が難しい状況は続くが、工夫次第で実りある研修は可能であると考える。評価については現行のルーブリックを、グーグルフォームで作成した。ルーブリックの作成と集約が簡易になり、持続可能性が高まった。

iPad の活用が情報収集に役立った

３　今年度の取組の成果及び課題

(1) 成果

・妙高市役所各部署、妙高市教育委員会、新井商工会議所との連携を継続することができた。（１学年　３学年）

・新たな連携先として、地元の企業家とのネットワークを構築できた。（１学年）

・ｉＰａｄを用いることにより調査活動を学年全体で一斉に行うことができた。（１学年・２学年）

・自己評価ルーブリックは、グーグルフォームを用いて作成と集約を効率的に進めることができた。（１学年）　☛補足１

・計画通りに進めることにこだわらず予定しいた内容を取捨選択することで、指導を継続することができた。（全体）　☛補足２

補足１　☛自己評価ルーブリックからみる能力値と自己肯定感の向上

以下の表は、当校の自己評価ルーブリック（左）と今年度１学年（120 名）で実施した２回の自己評価の数値の推移（右）を表したものである。２回の結果から能力値１、２、３はほとんどマイナス値（△）になった一方で能力値４、５がプラス値（赤枠線内）を示した。このことから４つの評価項目の値が向上したことがわかる。自己評価ルーブリックの集計結果は、生徒自身が能力向上を実感していることを示している。

新井高校の自己評価ルーブリック（Ｒ２～）

１	情報処理能力	低	１	～	５	高
２	論理的思考力	低	１	～	５	高
３	協働する力	低	１	～	５	高
４	問題能力解決力	低	１	～	５	高

10月～２月の各項目の推移

能力値 低 ⟷ 能力値 高

評価項目能力	1	2	3	4	5
情報処理能力	▲20.8%	▲24.6%	▲10.7%	▲0.2%	13.2%
論理的思考力	▲20.8%	▲4.2%	5.0%	15.6%	4.3%
協働する力	▲0.9%	▲6.4%	▲4.4%	▲1.5%	13.3%
問題解決能力	▲5.6%	▲7.4%	▲12.5%	▲20.6%	4.9%

２　取組内容とルーブリック

※令和３年度第２回総合的な探究の時間推進事業連絡協議会の提出資料より

補足２　☛計画を随時見直すことで、学びの継続を目指した。

コロナ禍や校内事情等で、計画していた活動等を急遽断念しなければならない状況は今年度も発生した。リモートや代替措置を講じながら学びを止めない対応に加えて、活動や指導の規模そのものを縮小させることで、次の活動へスムーズに移行できる思考を全体で共有するように心がけた。インタビュー先の調整や現地研修の実現が難しい場合も、スケジュール内で最低限の指導内容に切り替えることで、生徒も教師も無理なく活動を進めることができた。

⑵ 課題

・修学旅行先が、沖縄から県内に変更になったことで計画の再構築を迫られた。（２学年）
・全ての班がインタビューを実施することができなかった。（１、２学年）
・昨年実施した職員アンケートを今年度は実施することができなかった。
・１、２年生に探究学習の成果を伝える場面を計画していたが実現できなかった。（３学年）
・誰が担当しても実践できるものとして組み立てたが、学年によって取組に温度差がみられた。

⑶ 成果と課題のまとめ

振り返りの電子化・ＩＣＴの活用により活動の効率化を図ることができた。教師が予想する以上の指導計画や指導内容の場合は、見直しながら進めた。一方で課題としては、学年間の引き継ぎが上手くいかなかったことが挙げられる。担当職員の意識を高められなかったことが原因である。

４　３年間の取組の成果及び課題

新井高校の３年間の取組のキーワードは【新聞、インタビュー、自己評価ルーブリック】の３つである。

新聞については、従来から全学年で新聞レポートに取り組んでいたため、当校の探究学習との親和性が高かった。このことから日常的に行っているものと探究学習を結びつけることが有効であることがわかった。課題としては、成果を発表する形式として動画等、紙媒体以外のものの開発が十分にできなかったことが挙げられる。

インタビューについては、地元の行政と民間の事業所と連携した。コロナ禍で対面することが難しい中、リモート形式に切り替えたことは効果を上げた。また事後の生徒アンケートから、生徒の充実度が高いことが確認できた。今後も要の活動として継続していきたい。課題としては、質問とインタビュー先のマッチングをスムーズに展開させるための工夫が必要だということと、インタビュー先として、若年層を開拓することが挙げられる。

自己評価ルーブリックについては、振り返りと評価に用いた。グーグルフォームでルーブリックを作成したことでスムーズに集約と総括を達成することができた。課題としては、自己評価を実施できず、成果物と見取りによる評価になってしまった学年もあったことが挙げられる。

本校の探究学習は初年度の活動全体が、２年目の活動の基盤となる形で計画している。また、ひとつひとつの活動は、練習を繰り返しながら、レベルアップを図る内容となっている。このことにより、どの生徒でも無理なく取り組める探究学習になったと考える。

５　今後の展望

生徒は、「総合的な探究の時間」を通じて、「地域で学ぶ・地域から学ぶ」ことができた。卒業後には、生徒自身が地域住民の立場として、次世代の生徒に学びを与えるネットワークを構築したい。遠隔地でも、リモート形式の講話やインタビューを継続して社会情勢に影響されないコミュニケーションの機会を引き続き展開したい。

今後は「誰でもできる、続けてできる探究学習」の可能性を引き続き探る。１年生は「産業社会と人間」と連携しながら探究学習を進めているが、更に他教科との横断的な学習を実践したい。多様な選択が可能な総合学科の強みを活かした指導計画の作成と地域との交流を校内外に発信できる仕組みも増やしていきたい。